2016年03月23日 東京新聞 朝刊社会 31頁

児相担当 暴行報告怠る

相模原中2自殺 小6からSOS

両親から虐待を受け相模原市児童相談所（同市中央区）に通所していた市内の中学二年の男子生徒＝当時一三＝が二〇一四年に自殺を図り、先月末に死亡した問題で、生徒が小学六年の一三年秋から「家に帰りたくない。施設に行きたい」と、市側に繰り返し訴えていたことが分かった。

また、生徒が一四年十一月に自殺を図った直前、父親に投げ飛ばされる暴行を受け、学校側が児相に連絡したものの、児相の担当者は上司に報告せず、所長の職権で強制的に保護する措置が取られなかったことも分かった。

児相によると、一三年、当時小学生だった男子生徒の顔にあざがあるのを見つけた学校が虐待を疑い、市へ通告。その後生徒は祖父母宅と自宅を行き来する生活をし、市側に繰り返し施設への入所を求めた。

この間、児相は両親と六回面談。一四年十月上旬に母親の体調不良を理由に面談が中止となったため、一時保護を提案したが、両親は同意しなかった。

生徒は同月下旬、父親から投げ飛ばされ、ベッドで脇腹を打った。児相の担当者は学校からの報告で把握したが、「毎日通学し、学校で変わった様子は見られなかった」などの理由で上司へ報告せず、生徒とも面談していなかった。

児相の鳥谷明所長は二十二日の記者会見で「一時保護を含めた対応を検討すべきだった。対応の是非を検証していく」と話した。

「約束守らず手上げた」

生徒小6時 母が涙で説明

男子生徒の母親が二十二日、自宅前で報道陣の取材に応じ、生徒が小学六年の秋、約束を守らなかったことがきっかけで父親が手を上げたことを明らかにした。

母親は「自分も手を上げたことはあったが、息子との関係が良くなるように夫婦で話し合ってきた。やり切れない思いでいっぱいだ」と涙を流した。母親は「自殺の兆候に気付けなかったのは母親の責任」と述べた。

男子生徒が通っていた中学の教頭も同日、取材に応じ「学校としては精いっぱいの対応をしてきたつもりだが、結果を踏まえれば、至らなかったことがあったのだと思う」と悔やんだ。

相模原の中学生自殺の経過

2013年11月	▶相模原市中央こども家庭相談課から児童相談所に「男子生徒の顔にあざ」と通告。児相は事情聴取として把握。生徒が「家に帰るのが怖い」と市側に保護を求める
14年5月	▶生徒が親から暴力を受けたとして深夜にコンビニに駆け込む。警察官が保護
6月	▶中央こども家庭相談課から児相に再び通告。児相が親子通所面接を開始
10月7日	▶6回目の親子通所面接。生徒があったためて保護求める。両親は「もう来られない」
16日	▶児童福祉司が中学校を訪ね、生徒と面接
29日	▶中学校が父親からの暴力で生徒の腰部にあざがあると児相に連絡
11月	▶生徒が自殺を図り緊急入院と病院から児相に連絡
15年6月	▶生徒が法務型障害児入所施設に移る
16年1月	▶生徒が再入院
2月	▶病院で死亡

あり得ない対応だ

NPO法人「シンクキッズ―子ども虐待・性犯罪をなくす会」代表の後藤啓二弁護士の話 男子生徒からSOSがあったのに保護しなかった対応はあり得ない。生徒の両親が「（児童相談所に）もう来られない」と指導に応じなくなったのは虐待がより深刻化するサインだった。親と対立しないよう配慮するあまり、子どもの命を守れないのは本末転倒だ。

(c) .中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています